

『スッタニパータ』第五章 「パーラーヤナ・ヴァッガ」の研究

——第八経～第一七経の試訳——

並 川 孝 儀

本稿は「『スッタニパータ』第五章「パーラーヤナ・ヴァッガ」の研究——第二経～第七経の試訳——」『佛教大学 仏教学会紀要』第24号（2019年3月）に続くものである。研究目的や試訳に当たっての姿勢などについては、前稿を参照されたい。

第八経「若き学生ナンダの問い」

(1078) na ditṭhiyā na sutiyā na ñāṇena, munīdha Nanda kusalā vadanti,
visenikatvā anighā nirāsā, caranti ye te munayo ti brūmi.

「沈黙の聖者とは⁽¹⁾、〔根本原理であるアートマンを〕見ることによって〔知る〕のでもなく、聞くことによって〔知る〕のでもなく、知識によって〔知る〕⁽²⁾のでもない。ナンダよ、この世において〔悟りへの〕善なる〔道を求める〕人々は⁽³⁾〔そう〕語るのである。〔悩みや欲の〕軍を撃退して⁽⁴⁾、悩みなく、欲もなく修行する人々〔こそ〕が沈黙の聖者である、と私は説く」

(1) 因みに、1077偈の「この世にさまざまな聖者（munayo）がいる」について、SnA（p.595）は「クシャトリヤの人々は、アーjeeヴァカやニガンタの教徒などに（ājīvakanigaṇṭhādike）関して沈黙の聖者たちがいる、という」と註釈する。

(2) 中村訳は「(哲学的) 見解によっても、伝承の学問によっても、知識によっても」とし、宮坂訳、ノーマン訳もほぼ共通である。それに対して、荒牧訳は「〔アートマンの真理を〕見ているからでもなければ、〔それを〕聞いているからでもなく、なんらかの智慧があるからでもない」と全く異

なっている。

その訳の是非を論じる前に、これと類似した表現が1080偈 (*diṭṭhe sutenāpi*)、1082偈 c 句 (*diṭṭhaṃ va sutāṃ mutāṃ*)、1086偈 a 句 (*diṭṭhasutamutaviññātesu*) にもみられるので、それらを参照してみる。また、四章にも802偈 a 句 (*diṭṭhe va sute mute vā*)、812偈 d 句 (*diṭṭhasutaṃ mutesu vā*)、793偈 b 句、901偈 b 句、914偈 b 句 (*diṭṭhaṃ va sutāṃ mutāṃ vā*) にもみられ、他にも関連した表現が790偈 b 句、797偈 b 句、887偈 a 句 (*diṭṭhe sute sīlavate mute vā*)、798偈 cd 句 (*diṭṭhaṃ va sutāṃ mutāṃ vā sīlavatāṃ*)、839偈 ab 句 (*na diṭṭhiyā na sutiyā na ñāṇena sīlabbatenāpi*)、840偈 ab 句 (*no ce kira diṭṭhiyā na sutiyā na ñāṇena sīlabbatenāpi*) にみられる。

これらの用例に関して、中村元は1086偈の註で「見たり聞いたり考えたり識別した (*diṭṭhasutamutaviññātesu*)」の四つは古ウパニシャッドにおいてしばしば並べて挙げられており、それを承けているのであると、『ブリハドアーラニヤカ・ウパニシャッド』などの用例を掲げている。しかし、この点はこの偈でも1086偈でも訳出に反映されていない。同様に、宮坂宥勝は1078偈註解 (p.419) と1086偈の註解 (p.420-422) で次のように述べる。宮坂は1078偈で「見たり、聞いたり、知る対象は具体的にはウパニシャッドのアートマンの存在が予想される」と指摘しながらも、実際には「見たり、聞いたり、知ること (= 見解、学問、知識)」と訳しており、その点が全く反映されていない。1086偈の註解では、古期ウパニシャッドの『ブリハドアーラニヤカ・ウパニシャッド』や『チャンドーギヤ・ウパニシャッド』に類似した文言がみられると指摘する。その一例を挙げ「レータス (= 種子、ザーメン) を制御せしめるものは、アートマン (*ātman*)、内なる制御者 (*antaryāmin*)、不死なるもの (*amṛta*) である。〔それは〕 見られないもので〔はあるが〕 見る者、聞かれないもので〔はあるが〕 聞く者、思われないもので〔はあるが〕 思う者、知られないもので〔はあるが〕 知る者である (*'drṣṭo draṣṭā 'śrutāḥ śrotā 'manto mantā 'vijñāto vijñātā*)。それより他のものは見る者ではなく、それより他のものは聞く者ではなく、それより他のものは思う者ではなく、それより他のものは知る者ではない。それこそはアートマ

ンであり、内なる制御者であり、不死なるものである」(『ブリハドアーラニヤカ・ウパニシャッド』3.7.23)と述べている。この用例のように、見られるもの、聞かれるもの、思われるもの、知られるものの四種もあるが、その他の例もみられるとする。

この問題に関しては、他に高崎直道「ウパニシャッドの哲学」『講座 東洋思想 1 インド思想』東京大学出版会 pp.63-66。橋本一道「初期経典と古ウパニシャッドにおける見聞覚知表現について」『印仏研』第六十七巻一号 pp.(40)-(43)を参照。

以上より、このフレーズをどう訳すべきか考えてみる。ナンダと問答する第八経では、世尊の教えの三偈いずれもこうした用語によって説かれている。第八経は当時の宗教家や思想家を取り上げ、その立場を批判的に説くことがテーマとなっているようであるが、中でも1080偈と1082偈は、どうすれば清浄になれるかについて当時の宗教家や思想家たちの立場を批判した内容になっている。第四章にも「苦行によって〔身体を〕厭うこと、あるいはまた〔根本原理であるアートマンを〕見たこと、聞いたこと、思ったことが、清浄であると〔ある人々は〕声を高くして唱えるが、〔彼らは、この〕生存から〔次々とめぐる〕さまざまな生存に対する渴愛を離れずにいる (tapūpanissāya jigucchitaṃ vā, atha vā pi diṭṭhaṃ va sutāṃ mutāṃ vā, uddhamasārā suddhim anutthūṇanti, avītataṇhāse bhavābhavesu)」(901)と、ジャイナ教やバラモン教への批判と読み取れる偈にも同様のテーマで説かれている。特に、バラモン教に対しては彼らの解脱方法が批判の対象になるはずであり、その意味からもアートマンを知る解脱方法を批判したものと考えられる。つまり、こうしたフレーズは明確にバラモン教への批判を表現したものといえる。したがって、ここは中村訳などの「見解によっても、伝承の学問によっても、知識によっても」とするのではなく、荒牧訳のようにアートマンを想定した訳のほうが適切といえよう。ただ、荒牧訳は1082偈、1086偈では「見た真理であれ、聞いた真理であれ、思考した真理であれ、認識した真理であれ」とし、他方1078偈、1080偈では「〔アートマンの真理を〕見ているからでもなければ、〔それを〕聞いているからでもなく、なんらかの智慧があるからで

もない」、「〔アートマンの真理を〕 見ることによって清浄になるとも、聞くことによって」と訳が異なる。この一連の表現は統一して理解すべきでないかと考える。

したがって、ここでは「〔根本原理であるアートマンを〕 見ることによって〔知る〕 のでもなく、聞くことによって〔知る〕 のでもなく、知識によって〔知る〕 のでもない」といった解釈で、明らかにバラモン教批判を意識したものとして統一して訳すべきであろう。以下は、この訳に沿うことを断っておく。

(3) b 句の *kusalā* をどう訳すのか、シンプルな語だけに困難である。実際、中村訳は「真理に達した人たちは」と、荒牧訳は「りっぱな老師たちが」と、宮坂訳やノーマン訳は「練達の者たち」、「The experts」と、相違している。一つの判断として、最古層に用いられている用例を参考に考えてみたい。第四章の965偈 d 句に *kusalānuesī* がみられるが、そこでは仏教修行者の歩むべき本来的な在り方が説かれており、その修行者たちをそのように表現している。それを参考に、*kusalā*=*kusalānuesī* と解釈して、ここは「〔悟りへの〕 善なる〔道を求めている〕 人々は」と訳しておきたい。尚、本紀要の第24号で1039偈 c 句の *kusalo* を「〔教えを究めた〕 仏教修行者」と訳したが、それを「〔悟りへの〕 善なる〔道を求める〕 人」と訂正したい。

(4) 中村訳は「(煩悩の魔) 軍を撃破して」とあるが、最古層の經典には「煩悩」という用語はみられないので、中村訳の補訳は不適切であろう。荒牧は「いかなるものにも依存することがなくなって」と訳す。ここは、*visenikatvā* 「軍を撃退して」の軍 (*sena*) が具体的に意味しているのは、次に続く「悩み」と「欲」と解釈するのが文脈上適切と考える。1082偈の註(3)、1100偈の註(2)を参照されたい。

(1080) *ye kec' ime samaṇabrāhmaṇāse Nandā ti bhagavā,*
diṭṭhe⁽¹⁾ sutenāpi vadanti suddhiṃ,
sīlabbatenāpi vadanti suddhiṃ, anekarūpena vadanti suddhiṃ,

kiñcāpi te tattha yathā caranti, nātarim̐su jātijaran ti brūmi.

「世尊は語った。ナンダよ、これら沙門やバラモンの誰かが、〔根本原理であるアートマンを〕見たことによって、〔また〕聞いたこと〔など〕によって清浄になると語り⁽²⁾、〔また誰かが〕戒と禁欲の修行〔のみ〕によって⁽³⁾清浄になると語り⁽²⁾、〔また他の誰かが〕多くの方法によって⁽⁴⁾清浄になると語って、いかに彼らがそれぞれに語ったように修行していても、生まれと老い〔の苦しみ〕を乗り越えることはない、と私は説く」

(1) *diṭṭhe* は *diṭṭhena* と読む。

(2) この偈は、〔根本原理であるアートマンを〕見たことによって、〔また〕聞いたこと〔など〕によって清浄になると語る者、また戒と禁欲行によって〔のみ〕清浄になると語る者がそれを実践しようとも生まれと老い〔の苦しみ〕を乗り越えることはない、と説くが、ここには彼らが清浄になるという宗教的实践では苦しみを乗り越えることはできないという仏教の立場が表明されている。同様の用例は、第四章にも（1078偈の註(2)で紹介しているが）、ジャイナ教の苦行主義とバラモン教の解脱方法と思われる立場を紹介し、彼らはそれらによって清浄になると主張するが、それでは渴愛から離れることはできないと説いている。清浄になることに関して、仏教の立場はたとえば1107偈 *ab* 句に「〔そして、まず〕教えに対する〔深い〕思索があり、〔続いて〕平静な心と〔自己の存在に対する〕正しい自覚（念）によって清浄となることである（*upekhāsatisaṃsuddham dhammatakkapurejavam*）」と、〔まず〕世尊の教えに対する〔深い〕思索があり、〔続いて〕平静な心と〔自己の存在に対する〕正しい自覚によって清浄となると表明されている。

(3) この偈では、清浄になると信じる仏教以外の修行法の一つは〔根本原理であるアートマンを〕見たことによって、聞いたこと〔など〕によって、〔また〕戒と禁欲の修行〔のみ〕によって、〔また他の〕多くの方法によってと三通りを示した上で、いずれも生まれと老い〔の苦しみ〕を乗り越えることはない、と説く。そして続く1082偈で、「戒と禁欲の修行がすべて〔であるとの立場〕を捨て去って、……渴愛を知り尽くして、……〔こ

の世の〕激流を渡った」と説く。つまり、世尊の教えとしてこれこそ仏教の立場であると表明している。

ここでは「戒と禁欲の修行〔のみ〕によって清浄にならない」や「戒と禁欲の修行がすべて〔であるとの立場〕を捨て去って」という表現はどういう意味であるのかを少し考えてみたい。まず、この偈と関連する用例を眺めてみると、第四章には以下のように説かれる。

「戒の修行が最上であるという人々は、自制することによって清浄になると説く。禁欲の修行を受持して実践している人々は『この立場で我々は学修しなければならない。そうすれば、人は清浄になるであろう』〔といい〕、彼らは〔苦しみの〕生存に導かれていながらも、〔悟りへの〕善なる〔道を求める〕者であると語っている (sīluttamā saññamenāhu suddhiṃ, vataṃ samādāya upaṭṭhitāse, idh' eva sikkhema ath' assa suddhiṃ, bhavūpanītā kusalā vadānā)」(898偈)

「もし、戒と禁欲の修行から脱落してしまうことになれば、その人は〔決められた〕宗教的行為ができなくなってしまうと動揺する。〔にもかかわらず、〕彼はその立場でも清浄になることを欲し求めている。それは、まるで家から離れて〔共に生活する〕隊商から捨てられた人が〔隊商を欲し求める〕ように〔戒と禁欲の修行による清浄を欲し求めているのである〕

(sace cuto sīlavatāto hoti, sa vedhati kammaṃ virādhayitvā, sa jappati pathayatīdha suddhiṃ, satthā va hīno pavasaṃ gharamhā)」(899偈)

「それとは逆に、戒と禁欲の修行もすべて捨て去って、〔つまり〕過失があらうと、あるいは過失がなかろうと、こうした宗教的行為を〔捨て去って〕、清浄であるとか不浄であるといったことも求めることなく、〔そうしたことから〕離れて修行するとよい。〔たとえ〕寂静であっても〔それに〕固執しないで (sīlabbatam vāpi pahāya sabbam, kammañ ca sāvajjanavajjam etaṃ, suddhī asuddhī ti apatthayāno, virato care santim anuggahāya)」(900偈)

これらの他にも、「戒と禁欲の修行によっても、清浄になると私は説かない (sīlabbatenāpi na suddhim āha)」(839偈 b) という用例がみられる。

このように、戒と禁欲の修行に関してそれを最上であると特別視すると

か、あるいはそれにとらわれている姿勢に対して批判的に説かれているようである。因みに、後の Dh.p.271偈に「戒と禁欲の修行だけでも、また多くの教えを聞いても、また三昧を得ても、一人離れて寝ることによっても〔出離の安樂を体得し〕ない (na sīlabbatamattena bāhusaccena vā puna, atha vā samādhilābhena viviccaṣayanena vā)」と、同様の表現がみられる。

では、ここで同じ最古層の經典に戒などがどのように説かれているのかを眺めておく。第四章に多くが説かれている。まず、961偈にはサーリプッタがまもるべき戒と禁欲の修行 (sīlabbata) はどのようなものであるかを問うたのに対して、世尊が13偈 (963-975偈) で答える。そこには、精進に努めることや、盗みをせず、嘘をつかないこと、怒りや高慢に屈してはならないこと、満足を知ること、後悔しないこと、粗暴な言葉を発しないこと、五つの塵垢に対する貪りに打ち勝つことなどの他にも、瞑想に専念し、しっかりと目覚めていて、平静さを保ちところが安定していること、〔自己の存在を〕正しく自覚していて、心がすっかり解き放たれていることなどが説かれている。

また、848偈では、どのような戒を保持している人 (kathamsīlo) が寂靜を得られているかという問いに、世尊が13偈 (849-861偈) にわたって答える。そこには、渴愛を離れ、おののくこともなく、尊大ぶることなく、よく思慮して説法すること、未来に執着せず、過去に悲しまず、現に触れる欲望の対象に対しても厭い離れ、誤った見解に導かれないこと、誹謗中傷にも関わらず、平静で絶えず〔自己の存在を〕正しく自覚していること、自分が優れているとか劣っているとか等しいとかも思わないこと、世のはからいにも分別にもおもむかないこと、我がものという想いがいないことなどが説かれる。こうした戒の実践こそが寂靜を体得できると説いていることがわかる。

また、戒と禁欲の修行 (sīlabbata) とは表現されていないが、内容が関連しているので、世尊が11偈 (922-932偈) にわたり説いている戒 (pātimokkha) と三昧 (samādhi) の教えを、ここで取り上げておく。それらは、この世のものを我がものと想わないこと、恐怖におののかないこ

と、食べ物や衣服などを蓄えないこと、瞑想してうろうろ歩き回らないこと、静かな座処や我処で暮らすこと、怠けたり、談笑したり、性的行為を行ったり、装いを飾ったりしなすこと、さまざまな占いを行わないこと、売り買いに関わらないこと、生活様式や智慧や戒と禁欲の修行によって他の人を軽蔑しないことなどである。

ここで、こうした点を踏まえて、なぜ戒と禁欲の修行によって清浄になることが批判的に説かれているのかについて少し考えてみたい。最古層の經典に説かれる戒 (sīla) や、戒と禁欲の修行 (sīlabbata)、そして戒 (pātimokkha) と三昧 (samādhi) の説示内容を概観したが、その限りにおいてそれらに大きな差異はみられず、いずれも当時の修行に関する仏教の根本的立場が示されているものと理解してよい。とすれば、本偈に説かれる「〔また誰かが〕 戒と禁欲の修行〔のみ〕によって清浄になると語り……いかに彼らがそれぞれに語ったように修行していても、生まれと老い〔の苦しみ〕を乗り越えることはない、と私は説く」という、一見、戒と禁欲の修行を批判しているかのような表現は、どのように理解すればよいのであろうか。

ひとつの見方は、最古層の經典に説かれる戒 (sīla) には、瞑想に専念し、しっかりと目覚めていて、平静さを保ち、心が安定し、〔自己の存在を〕正しく自覚していて、心がすっかり解き放たれていることなど禪定に関する教えが説かれているが、この偈の「戒と禁欲の修行〔のみ〕によって清浄になる」というフレーズの「戒と禁欲の修行」には、仏教で重要な禪定や心のあり様が説かれていないから批判的であるのではないかと解釈できる。他にも、智慧 (paññā) も悟りへの重要な要件として説かれて (1035偈など) おり、そうしたことで批判的に説かれたのではなかったかとも理解できる。たしかに、こうした理由も十分に考えられるが、何よりも戒や禁欲の修行について最上であると特別視したり、それにとらわれている姿勢に対して批判的に説かれたものと考えるのが妥当であろう。決して戒や禁欲の修行それ自体を批判したわけではないのである。したがって、「戒と禁欲の修行〔のみ〕によって清浄になる」と、〔のみ〕という限定

的な表現によって世尊の意図が示せるものとして補訳した。こう理解すれば、なぜ「戒と禁欲の修行〔のみ〕によって清浄にならない」や「戒と禁欲の修行がすべて〔であるとの立場〕を捨て去って」という表現の意味も明らかになるはずである。

ところで、*sīlabbata* の *bata* (= *vata*) の訳をみると、中村・ノーマン訳は「誓い」、宮坂訳は「禁戒」、荒牧訳は「禁欲行」としている。いずれも当時の修行者たちの修行法をいっているのであろうが、中でも「誓い」は何を意味しているのか定かではない。

- (4) 1079偈 d 句の「多くの方法によって (*anekarūpena*)」に対して、SnA (p.595) は *kotukamaṅgalādinā* と註釈するが、村上訳 4 (p.116、p.119 註 (5)) はこれを *kotūhala-maṅgala* と考え、「瑞相などによって」とする。

- (1082) *nāhaṃ sabbe samaṇabrāhmaṇāse Nandā ti bhagavā, jātijarāya nivutā ti brūmi, ye s' īdha diṭṭhaṃ va suttaṃ mutaṃ vā, sīlabbataṃ vā pi pahāya sabbhaṃ, anekarūpaṃ pi pahāya sabbhaṃ, taṇhaṃ parinñāya anāsavaṃ, te ve narā oghatiṇṇā ti brūmi.*

「世尊は語った。ナンダよ、すべての沙門とバラモンが生まれと老い〔の苦しみ〕に覆われている、と私はいつてはいない。この世において、〔根本原理であるアートマンを〕見たり聞いたり思ったこと⁽¹⁾や、戒と禁欲⁽²⁾の修行がすべて〔であるとの立場〕を捨て去って、〔また〕多くの〔他の修行〕方法をすべて捨て去り、渴愛を知り尽くして、漏れ入った〔渴愛〕がなくなった⁽³⁾、その人々〔こそ〕が〔この世の〕激流を渡った者である、と私は説く」

- (1) 1078偈の註(2)を参照されたい。
- (2) *sīlabbata* を中村訳は「戒律や誓い」、荒牧訳は「戒律行・禁欲行であれ」、宮坂訳は「戒めや禁戒」としており、*vata* に関しては大きく異なっている。
- 1080偈の註(3)を参照されたい。
- (3) 「漏れ入った〔渴愛〕がなくなった」と補訳を渴愛とするが、中村訳は「心に汚れのない」、荒牧訳は「無限の過去以来漏水してきた輪廻的存在の潜勢力のなくなった」、宮坂訳は「もろもろの煩悩の汚れなき」と、そ

れぞれ「心の汚れ」、「無限の過去以来漏水してきた輪廻的存在の潜勢力」、「煩惱の汚れ」と訳している。ただ、いずれも根拠が不明で、宮坂訳には最古層にはみられないはずの煩惱が用いられており、同意しかねる。同様の用例は1100偈にもみられ、筆者はそこでは「貪り」を補っているが、いずれも文脈上からの補訳であることを断っておきたい。1078偈の註(4)、1100偈の註(2)も参照されたい。

第九經「若き学生ヘーマカの問い」

(1086) *idha diṭṭhasutamutaviññātesu piyarūpesu Hemaka,*
chandarāgavinodanam, nibbānapadam accutam.

「ヘーマカよ、見て、聞いて、思っ、識って〔というように根本原理であるアートマンを知るのと同様であっても、そのように生じる〕この世における好ましいものへの⁽¹⁾興味と貪りを取り除くこと〔こそ〕が、不滅なる涅槃の境地なのである」

(1) *diṭṭhasutamutaviññātesu piyarūpesu* を中村訳は「見たり聞いたり考えたり識別した甘美な事物に対する」と、宮坂訳は「見られたり、聞かれたり、思われたり、知られたもろもろの愛好すべきものに対して」とするのに対して、荒牧訳は「見た真理であれ、聞いた真理であれ、思考した真理であれ、認識した真理であれ、わがものとして大切にしている宗旨があるであろうが、それらにひかれる」とまったく異なっている。

ここでは、1078偈の註(2)で述べたように、根本原理であるアートマンを見たり、聞いたり、思ったり、識ったりしたのと同じような方法であっても、実際に認識するこの世の好ましいものを対象としており、根本原理のアートマンに対する定型句を批判的な意味合いをもって世尊の教えを表現しようとした偈ではないかと考えられる。

(1087) *etad aññāya ye satā, diṭṭhadhammābhiniibbutā,*
upasantā ca te sadā, tiṇṇā loke visattikan ti.

「この〔興味と貪りを取り除くことこそが不滅なる涅槃の境地である〕こと

をよく知って、〔自己の存在を〕正しく自覚していて⁽¹⁾、存在するものを目の当たりにできる〔この世で〕涅槃した人々は⁽²⁾、絶えず寂静であって、この世〔に存在するもの〕への執着を乗り越えている」

- (1) 因みに、註釈文献 SnA (p.596) は、a 句に関して「すべての形成されたものは無常であるなどと内観し、次第にそのことをよく知って、身体を観察し心にとどめることなどによって自己を正しく自覚することである」と註釈する。
- (2) *diṭṭhadhammābhinibbutā* を荒牧訳は「いまここにありありと真理をさとする涅槃の静寂を体得し静寂をきわめているとき、そのようなひとびとこそ」とし、同じ用例の1095b 偈では「いまここにありありと真理をさとして涅槃にあるひとびと」としている。中村訳や宮坂訳のように「現世において全く煩いを離れた人々」や「現に心の安らぎを得たその者たち」でもいいが、ここは用語のもつ原義に沿って「存在するものを目の当たりにできる〔この世で〕涅槃した人々は」とする。ただし、筆者も以前は同じように「現世において涅槃した人々は」と訳していた。因みに、SnA (p.596) は、「法性を知り、法性を見て (*viditadhammattā diṭṭhadhammattā*)、貪りなどが消滅することで涅槃した人々である」と註釈する。尚、*diṭṭhe dhamme* に関しては、1066偈の註(1)を参照されたい。

第一〇経「若き学生トッデーヤの問い」

- (1089) *yasmim kāmā na vasanti, Todeyyā ti bhagavā, taṇhā yassa na vijjati,*
kathaṃkathā ca yo tiṇṇo, vimokkho tassa nāparo.

「世尊は語った。トッデーヤよ、さまざまな欲望の対象はなく、渴愛も存在しておらず、議論に議論を重ねることを⁽¹⁾越えた人、その人の解脱は他の〔沙門などの解脱なのでは〕ない⁽²⁾」

- (1) abc 句の内容は、1070偈 cd 句「欲望の対象を捨てて、議論することから離れて、渴愛の滅尽を昼夜に見つめよ (*kāme pahāya virato kathāhi, taṇhakkhayaṃ nattamahābhipassa*)」に対応する。それ故に、*kathaṃkathā* を中村訳や宮坂訳のように「諸々の疑惑を」ではなく、「議論に議論を重ね

ることを」とすべきである。kathamkathā についての詳細は、1064偈の註(1)、1070偈の註(2)を参照されたい。

- (2) 中村訳の「別に解脱は存在しない」と宮坂訳の「〔それより〕他の解脱はない」との意味に対して、荒牧訳は「さらにそのうえに解脱して自由になることはない」と異なった解釈をしている。この偈は「欲望の対象はなく、渴愛も存在しておらず、議論に議論を重ねることを越えた人の解脱はどのようなものですか」との問いに答えたものであり、また議論に議論を重ねているような沙門を批判的に説いたものと想定すると、nāparo は他の沙門の解脱と解釈するべきではないかと考える。

- (1091) nirāsayo so na so āsasāno, paññāṇavā so na ca paññakappī,
evam pi Todeyya munim vijāna, akiñcanaṃ kāmabhava asattan, ti.

「その人は〔何に対しても〕関心をもっていないし、願うこともない。その人は智慧があっても、智慧によって〔何かを〕企てる人ではない。何も所有することなく、欲望の対象に〔まみれた〕生存に対しても⁽¹⁾執着しないこのような人を、トッデーヤよ、沈黙の聖者であると知るがよい」

- (1) 中村訳も宮坂訳も「欲望の生存に」とするが、荒牧訳は「さまざまな欲望の対象に対しても、くり返し再生してこのまま生きていく輪廻的存在に対しても」と、kāma**bhava** を dvaṃ**dva** で解釈しているようである。-bhave をくり返し再生してこのまま生きていく輪廻的存在と補訳しているが、こうした解釈は荒牧訳に一貫してみられる。因みに、これは註釈文献 SnA (p.597) が kāma**bhava** を kāme ca bhave ca と解釈しているのと同様である。

第一一経「若き学生カッパの問い」

- (1093) majjhe sarasmim tiṭṭhatam Kappā ti bhagavā, oghe jāte mahabbhaye,
jarāmaccuparetānaṃ, dīpaṃ pabrūmi Kappa te.

「世尊は語った。カッパよ、計り知れないほどの恐ろしい激流が起こった時にその流れの真っ只中にいる人々〔のように〕、老い〔の苦しみ〕と死神⁽¹⁾に打ち負かされている人々ために避難所を、カッパよ、私はあなたに説こう」

- (1) 「死」の表現が、この偈の以降、韻律上変わらないにもかかわらず *maccu* と *māra* に使い分けられている。前者は「死、(死神として擬人化された) 死」、後者は「死、悪魔、魔王」を意味し、ここでは前者を「死神」、後者を「死の魔王」と区別して訳しておく。中村訳は前者を「死」、後者を「悪魔」と区別しているが、荒牧訳も宮坂訳も両方とも「死」と訳す。

(1094) *akiñcanaṃ anādānaṃ, etaṃ dīpaṃ anāparaṃ,*
nibbānaṃ iti naṃ brūmi, jarāmaccuparikkhayaṃ.

「何も所有することがなく、執着することもないところ、これが比類なき避難所である。それを涅槃と私はいう。〔そこでは〕老い〔の苦しみ〕と死神は滅してしまっている」

(1095) *etad aññāya ye satā, diṭṭhadhammābhinibbutā,*
na te māra-vasānugā, na te mārassa paddhagū ti.

「この〔比類なき避難所である涅槃では、老いの苦しみと死神は滅してしまっている〕ことをよく知って、〔自己の存在を〕正しく自覚していて、存在するものを目の当たりにできる〔この世で〕涅槃した人々⁽¹⁾は、死の魔王の支配に従わないし、死の魔王の奴隷でもない」

- (1) 1087偈の註(2)を参照されたい。

第一二経「若き学生ジャトゥカンニンの問い」

(1098) *kāmesu vinaya gedhaṃ Jatukaṇṇī ti bhagavā, nekkhammaṃ daṭṭhu khemato,*
uggahītaṃ nirattaṃ vā, mā te vijjittha kiñcanaṃ.

「世尊は語った。ジャトゥカンニンよ、さまざまな欲望の対象への貪りを取り去りなさい。〔欲望の対象への貪りから〕出離〔した生活〕を安穩であるからと考えて。取ったものであらうと、捨てたものであらうと⁽¹⁾、いかなるものもあなたにとってあつてはならない」

- (1) 中村訳のように「取り上げるべきものも、捨て去るべきものも」と一般的に解釈するのに対して、荒牧訳は「テーゼとして定立したり、あるいは

反対に虚無的に否定したりすること」と宗教や思想的な立場に限定した解釈を行っている。ここは、前後の偈の内容や文脈から c 句の *uggahītaṃ nirattaṃ* を *ud √grah* 「取る」と *nir √as* 「捨てる」の過去分詞と解釈して、一般的な意味でよいであろう。何を取り、何を捨てるのかについては、SnA (p.598) に、*uggahītaṃ* とは「渴愛と誤った見解によってとらわれたもの (*taṇhādīṭṭhivasena gahitaṃ*)」と、*nirattaṃ* とは「投げ捨てるべきものや、放棄すべきこと (*nirasitabbaṃ vā muñcitabban*)」と註釈されている。

ここで、この用法に関連する同類の例についても少し述べておこう。ここでの *uggahītaṃ nirattaṃ vā* と同類の用例とは *attaṃ vā nirattaṃ vā* (cf. 787 偈 c 句、858 偈 cd 句、919 偈 d 句) である。この句に対して、中村訳、宮坂訳はいずれも *atta* を *ā √dā* 「取る」の過去分詞で、*niratta* を *nir √as* 「捨てる、放棄する」の過去分詞としており解釈は一貫している。それに対して、荒牧訳は919 偈では前者を「自我的存在」と後者を「虚無的存在」と、*attan* 「自我」の意味で解釈しており、ノーマンは787 偈ではそれぞれ「self-view」と「non-self-view」と解釈する。石飛訳は787 偈、858 偈、919 偈ではどちらの意味もありえるとしているのであろうか、保留している。このように、この用例は我論とも関連しうるものだけに重要ではあるが、解釈はいまだ確定的ではない。

(1099) *yaṃ pubbe taṃ visosehi, pacchā te māhu kiñcanaṃ,*
majjhe ce no gahessasi, upasanto carissasi.

「過去に存在した〔欲望の対象への貪りなど〕を干涸びさせよ。未来に〔存在するであろう〕いかなる〔欲望の対象への貪りなど〕もあなたにはあつてはならない。現在において⁽¹⁾、もし〔何にも〕執着しないならば、あなたは寂靜した者として修行し続けるであろう⁽²⁾」

(1) 中村訳は「中間においても」としているが、荒牧訳のように *majjhe* は「中央」ではなく *pubbe* と *pacchā* とから「現在」と訳すべきである。

(2) 「寂靜した者として修行し続けるであろう」という未来形の表現は、寂靜しても修行をし続けることの大切さを説いているのではないかと考える。

同様な例は、1114偈にもみられる。寂静を得ても修行し続けるというのが、当時の仏教修行者の姿勢であったのである。因みに、本偈は949偈と同一である。

(1100) sabbaso nāmarūpasmim, vītagedhassa brāhmaṇa,
āsavāssa na vijjanti, yehi maccuvasaṃ vaje, ti.

「バラモンよ、いかなる場合でも観念的要素（名）と物質的要素（色）に対する⁽¹⁾貪りを離れた人、その人には〔さまざまな貪りが〕漏れ入ることはない⁽²⁾。〔実は、〕それら〔貪りが漏れ入ること〕によって人は死神の支配に従うことになるのである⁽³⁾」

(1) 1037偈の註(1)を参照されたい。

(2) c 句の āsavā を中村訳と宮坂訳は「煩惱」や「煩惱の汚れ」としているが、この最古層の段階で煩惱という考え方が定着していたかは疑問である。荒牧訳は1082偈の場合と同じ訳である。1078偈の註(4)、1082偈の註(3)を参照されたい。

(3) 中村訳は「だから、かれは死に支配されるおそれがない」と、荒牧訳は「したがって、そのような輪廻的存在の潜勢力によって死神の跳梁する領域へ迷い込むということもない」と、いずれも死に支配されるおそれがないとか、その領域へ迷い込むということもないと解釈しているが、他方で宮坂訳は「それら（＝もろもろの煩惱の汚れ）によって、死魔の勢力におもむくのである」と、ノーマン訳は「by reason of which would go under the influence of death」と正反対の解釈となっている。d 句の yehi は、c 句の āsavā を指し、「さまざまな貪りが漏れ入ることによって」と解釈でき、したがって d 句の意味は「死神の支配に従うことになる」となるはずである。中村訳、荒牧訳には疑問が残る。

第一三経「若き学生バドゥラーヴダの問い」

(1103) ādānataṇhaṃ vinayetha sabbaṃ Bhadrāvudhā ti bhagavā,
uddhaṃ adho tiriyaṇ cāpi majjhe, yaṃ yaṃ hi lokasmim upādiyanti,

ten' eva māro anveti jantum.

「世尊は語った。バドゥラーヴダよ、上のものであれ、下のものであれ、横のものであれ、中央のものであれ⁽¹⁾、〔それらに〕執着しようとする渴愛をすべて取り去るべきである。この世〔に存在するもの〕を〔人が〕執着するからこそ、死の魔王が人⁽²⁾に付きまとうのである」

(1) 1055偈の註(1)を参照されたい。

(2) c 句の jantu を、中村訳と宮坂訳は「人」とするのに対して、荒牧訳は「生き物」とより大きな概念で解釈している。因みに、註釈文献 SnA (p.599) では、satta という語で言い換えている。

(1104) tasmā pajānaṃ na upādiyetha, bhikkhu sato kiñcanaṃ sabbaloke,
'ādānasatte' iti pekkhamāno, paṇaṃ imaṃ maccudheyya visattan.

「それ故に、仏教修行者は〔執着するから死の魔王が人に付きまとうことを〕了知しつつ、〔自己の存在を〕正しく自覚していて、この世に存在するいかなるものにも執着しないのがよい。死神の領域に寄りかかったこうした人を執着にとらわれている〔人〕と観察しつつ⁽¹⁾」

(1) 荒牧訳は c 句の ādānasatte を「〔世間的存在を〕所有しつつける執着があるかぎり」と理解し、続けて「ここなる諸生物は死神の跳梁する領域につなぎとめられるというように観察して思惟することによってである」と訳しているが、その場合 iti をどのように理解すればよいのであろうか。iti を考慮に入れて読むならば、ādānasatte を「執着のとらわれの中にいる〔人を〕」と解釈して、cd 句を「死神の領域に寄りかかったこうした人を、《執着にとらわれている〔人〕》と観察しつつ」と訳すべきなのであろう。中村訳や宮坂訳、ノーマン訳は、ほぼこれと同じ訳となっている。

第一四経「若き学生ウダヤの問い」

(1106) pahānaṃ kāmacchandānaṃ Udayā ti bhagavā, domanassāna cūbhayaṃ,
thīnassa (ca) paṇūdanaṃ, kukkucānaṃ nivāraṇaṃ.

「世尊は語った。ウダヤよ、〔それには、まず〕欲望の対象への興味を⁽¹⁾捨て、

憂いと沈鬱な心の両方を⁽²⁾取り除き、後悔しないようにすること〔である〕」

- (1) a 句の *kāmacchanda* を中村訳は「愛欲」、荒牧訳は「さまざまな欲望の対象にひかれる関心」、宮坂訳は「もろもろの欲望や欲求」とするが、この複合詞を中村訳と宮坂訳は *dvamdva* として、荒牧訳は *tatpuruṣa* として訳している。この複合詞には *kāmaguṇesu chandaṃ* という用例 (Th.1105) があることから、ここはその用法に従って Locative *tatpuruṣa* で解釈する。
- (2) ab 句を、荒牧訳は「さまざまな憂悩にひきずられたり睡気に負けたりするという両方のことを」とするのに対し、中村訳は「愛欲と憂いとの両者を」と、*ubhayaṃ* (両者) の解釈が異なっている。語順からみれば中村訳が、意味上からみれば荒牧訳が適切であろう。宮坂訳は「もろもろの欲望や欲求を捨てること、またもろもろの憂悩もろとも〔捨てること〕、また沈鬱を除き去ること」と折衷案のようになっている。ここは、意味上より解釈するのが適切であろう。

(1107) *upekhāsatisaṃsuddhaṃ, dhammatakkapurejvaṃ,*
aññāvimokhaṃ pabrūmi, avijjāya pabhedanaṃ.

「〔そして、まず〕教えに対する〔深い〕思索があり、〔続いて〕平静な心と〔自己の存在に対する〕正しい自覚によって清浄となることである⁽¹⁾。〔そして、真理を見極めない〕無知を突き破って、了知によって解脱すること⁽²⁾である、と私は説く」

- (1) a 句の *upekhāsatisaṃsuddhaṃ* は、後の色界第四禪の規定では *upekhāsatiṭṭhisaṃsuddhiṃ* と説かれているが、その表現がこの最古層の偈にすでにみられることは興味深い。因みに、この規定の *upekhā* と *sati* の複合詞の訳を、片山訳は「平静による念の清浄のある」と *tatpuruṣa* で読んでいるが、*dvamdva* で解釈すべきであろう。水野訳も同様に「捨によって念が清浄となった」と *tatpuruṣa* での訳となっている。水野弘元『仏教要語の基礎知識』春秋社 pp.218、片山一良訳『長部（ディーガニカーヤ）戒蘊篇 I』大蔵出版 pp.219。
- (2) *aññāvimokhaṃ* を中村訳は「正しい理解による解脱」と、荒牧訳は「真

理を直接に知ることによって解脱して自由になること」と、宮坂訳は「完全な智による解脱」とし、*aññā* の意味はそれぞれ「正しい理解による」、「真理を直接に知ることによって」、「完全な智による」と微妙に異なっている。*aññā* がここではどのような意味で用いられているのか判断しかねる。因みに、註釈文献 SnA (p.599) では、1105偈 e 句の *aññāvimokkhaṃ* を *paññānubhāvanijjhātāṃ vimokkhaṃ* と解釈する。村上訳 4 (p.138) は「智慧の威力によって思惟された解脱」とするが、*-nijjhātāṃ* の異本には *-nijjātāṃ* もあり、これに従うと「智慧の威力によって生じた解脱」とも読める。

(1109) *nandīsaṃyojano loko, vitakk’ assa vicāraṇā,*
taṇhāya vippahānena, nibbānaṃ iti vuccati.

「この世〔に存在する〕人は、喜びに束縛されている⁽¹⁾。この〔世に存在する〕人にとって憶測が思考なのである⁽²⁾。渴愛を捨てることによって涅槃といわれる⁽³⁾」

(1) a 句を中村訳も宮坂訳も「歓喜に束縛されている」と一般的な理解となっているが、荒牧訳は「拘束する縄とは、〔禅定に味着する〕楽欲である」と禅定修行における状態を想定している。

(2) b 句を中村訳は「思わくが世人をあれこれ行動させるものである」と、荒牧訳は「ここなる〔世間的存在〕にとって、さまざまに思惟を散動させるものとは、さまざまな存在を論理的に思弁することである」と、宮坂訳は「妄想がそれ（＝結縛）のはたらきの原因です」と、ノーマン訳は「Speculation is its investigation」と、それぞれ *vicāraṇa* の解釈に相違がみられる。因みに、村上訳 (p.140) も「活動させる」と訳す。a 句は世俗的な存在者の感性を、b 句は悟性をそれぞれ表現したものと理解すると、この世の人は一方で「喜びに束縛されている」状況にあり、他方で「思考は憶測なのである」状況にあるということになる。

(3) 涅槃とは、「渴愛 (*taṇhā*) を捨てることによって得られる」と表現されて、煩悩が消滅したとは説かれていない。

- (1111) *ajjhattañ ca bahiddhā ca, vedanaṃ nābhinandato,*
evaṃ satassa carato, viññāṇaṃ uparujjhati

「心の内に対しても、外のものに対しても、〔それぞれの〕感覚にいちいち喜ばず、そのようにして〔自己の存在を〕正しく自覚していて修行し続けていれば、〔その仏教修行者の〕識別作用は減するのである」

第一五経「若き学生ポーサーラの問い」

- (1114) *viññāṇaṭṭhitiyo sabbā Posālā ti bhagavā, abhijānaṃ tathāgato,*
tiṭṭhantaṃ eṇaṃ jānāti, vimuttaṃ tapparāyanaṃ.

「世尊は語った。ポーサーラよ、すべての識別作用のありさまを知り尽くしている如来は、〔何もないと観察する〕そうした〔仏教修行者〕を〔すでに〕解脱していながら、解脱を究極の目的として〔今も修行〕し続けている人⁽¹⁾であると知っている」

- (1) cd 句を中村訳は、全き人（如来）は「かれの存在するありさまを知っている。すなわち、かれは解脱していて、それをよりどころとしていると知る」と、また宮坂訳も如来は「存在していながら解脱した者で、それを依りどころ（＝究極）とすると知る」とする。ノーマン訳は「The Tathāgata …… knows [that (person) standing (in the world), (or) released, (or) destined for that (release).]」とし、jānāti の目的語である tiṭṭhantaṃ、vimuttaṃ、tapparāyanaṃ の三つを並列に理解している。因みに、こうした解釈は SnA (p.601) とほぼ同じで、c 句に対しては「行為をなすことによってこの人が存在していることを知る (kammābhisamkhāravasena tiṭṭhantaṃ etaṃ puggalaṃ jānāti)」とし、d 句の vimuttaṃ は「何もないという境地に心に向けた (ākiñcaññāyatanādhimuttaṃ)」とし、tapparāyanaṃ は「それに至る (tammayaṃ)」と註釈する。それに対して荒牧訳は、如来であれば「そのような〔いかなる存在も存在しない禪定の位にある修行者〕も、〔依然として世間的存在として意識の流れをもって〕存続しつづけるのであって、〔そのいかなる存在も存在しない禪定の位からも〕出離するときには、また同様〔の世間的存在〕へ向かって還帰することをも知っている」と、c

句の *tiṭṭhantam* と d 句の *tapparāyaṇam* の解釈に、他と相違がみられる。ここでは、如来は「そうした〔仏教修行者〕を〔すでに〕解脱していながら、解脱を究極の目的として〔今も修行〕し続けている人である」と知っている」と訳しておきたい。そう解釈すれば、1099偈 d 句の「あなたは寂靜した者として修行し続けるであろう (*upasanto carissasi*)」という表現とも対応し、そうした仏教修行者の在り方が当時の仏教の立場を表明していたものではなかったかと考えられる。

(1115) *ākiñcaññāsambhavaṃ ñatvā, nandī saṃyojanaṃ iti,*
evam evaṃ abhiññāya, tato tattha vipassati,
etaṃ ñāṇaṃ tathaṃ tassa, brāhmaṇassa vusīmato, ti.

「〔そうした仏教修行者は〕何もないという〔境地に〕存在していることを⁽¹⁾『〔その境地に対する〕喜びは〔その境地に対する〕縛りである』⁽²⁾と知って、そのようであり、そのようであると〔繰り返し〕了知して、そ〔の境地〕から〔出たり、また〕そ〔の境地〕で〔自在に〕観察する⁽³⁾。こうしたことが、修行を完成したかの真のバラモンのあるがままに〔観察する〕智慧である」

(1) a 句の *ākiñcaññāsambhavaṃ* を中村訳は「無所有の成立するもとを」と、荒牧訳は「いかなる存在も存在しない禪定の位の存在について」と、宮坂訳は「無所有〔の境地〕が可能であることを」とする。ここでは、*sambhavaṃ* を「存在すること、属すること」と理解し、「何もないという〔境地に〕存在していることを」と訳す。因みに、註釈文献の SnA (p.601) では *ākiñcaññāsambhavaṃ* を *ākiñcaññāyatanaṃ janakaṃ kammābhisaṃkhāraṃ* と解釈し、その村上訳 4 (p.147) は「無所有の境地を生む業の準備推進力を」とする。

(2) b 句の *nandīsaṃyojanaṃ* は、1109偈 a の *nandīsaṃyojano* と同じ表現であるが、そこでは世俗的な存在者の在り方をして説かれていたが、ここでは体得した禪定の境地に喜びをもてば、それは縛りとなると、仏教修行者に対して説いている。

(3) c 句の *tato tattha* について、中村訳は「そこから（出て）それについて」、

荒牧訳は「そこから超脱するように、そこにありながら」、宮坂訳は「そこから、そのとき」とそれぞれに訳しているが、文字通り「そこから、そこで」と理解し、「そ〔の状態〕から〔出たり、また〕そ〔の状態〕で」と解釈して訳す。

第一六経「若き学生モーガラージャの問い」

- (1119) *suññato lokam avekkhassu, Mogharāja sadā sato,*
attānudiṭṭhim ūhacca, evam maccutaro siyā,
evam lokam avekkhantaṃ, maccurājā na passati.

「この世〔に存在するもの〕は空であると観察しなさい。モーガラージャよ、絶えず〔自己の存在を〕正しく自覚していて、我〔は実在するということ〕に基づいた誤った見解⁽¹⁾を断って。そのようにすれば、死神を乗り越えられるであろう。このようにしてこの世〔に存在するもの〕を観察すれば、死神の王は〔その人を〕見ることがない⁽²⁾」

- (1) 中村訳は「自我に固執する見解」、荒牧訳は「自我的存在を思考するドグマ」、宮坂訳は「自我の邪見」、ノーマン訳は「the view there is a self」とする。因みに、SnA (p.602) は「有身見 (sakkāyadiṭṭhi)」と註釈する。
- (2) この偈は、sata の実践とバラモン教が説いた我の否定を関連させて、それによって空を観察すれば死の苦しみを乗り越えることができると説いた偈である。その意味で、この偈は後に無我思想へと構築される原点と位置づけられるのではないかと考えられる。

この偈の c 句 (*attānudiṭṭhim ūhacca*) と関連すると思われる916偈「世尊が説かれた。誤って分別するといわれることの根本である『私は存在する』ということをよく考えて完全に抑止するとよい。どんな渴愛も心の内にあり、それらを取り去るために絶えず〔自己の存在を〕正しく自覚して学修するとよい (*mūlaṃ papañcasamkhāyā ti bhagavā, mantā 'asmī' ti sabbam uparundhe, yā kāci taṇhā ajjhantaṃ, tāsam vinayā sadā sato sikkhe*)」も、ここでみておこう。この偈の主要な部分である b 句に解釈の相違がみられるので、まずその点を少し述べておこう。b 句の *mantā asmi* に関して、中村

訳は「〈われは考えて、有る〉」と、宮坂訳は「私は思考している」、石飛訳は「考えたあと、わたしはいる」、荒牧訳は「『わたくしは存在する』」というようにすべての自我意識を真知によって思惟して」、ノーマン訳は「Being a thinker, …… “diversification” (i.e. the thought) “I am”」と解釈する。ここには、mantā に関しては、mantar の sg.nom. とする解釈と、manteti の gerund とする解釈で相違がみられる。ここで、いずれの訳が適切であるのかを考えるには、a 句の papañca の根本が何であるかということと関連するが、それが「私が考えて有る」ことや「私は思考している」ことなのか、それとも「私が存在する」ということなのかである。この偈の d 句は、abc 句で示される誤った人間の在り方を正すための修行を説いたものであり、その意味で誤った人間の在り方は、「考えて、有る」ことでも「思考している」ことでもなく、「私は存在する」という捉え方なのであると理解するのが適切であろう。最古層の經典でアートマンを想定できる用例として、他にも同様に解釈する若干の見解もみられるが、少なくともこれらの二偈は挙げることができる。

ここで本筋から少し逸れるが、「私は存在する」という在り方に大きく関わる papañcasamkhā の papañca なる語について考えておきたい。この用語の理解は一定しておらず、とりわけ最古層の經典での用法となると根拠が乏しく、その意味を確定することは困難といわざるをえない。諸訳を眺めても、その事情は明らかである。916偈で中村訳は「迷わせる不当な思惟」と、荒牧訳は「つぎからつぎへと輪廻転生しようとしつづける世間的存在にして一つ二つと数えられる個体存在なるもの」、宮坂訳は「妄想」、ノーマン訳は「“diversification”」と、そして石飛訳は「多様な想い」と、同じ石飛訳とノーマン訳を除き、さまざまである。筆者も以前は「誤った分別で対象を捉えること」と後に一般化される意味で訳していたが、最古層のような經典については、後に教理化される意味ではなく、原義に即し、そしてできる限り当時の用法に沿って訳すことが望ましいと考えているので、その立場で再考してみたい。papañcasamkhā の用例は874偈 d 句にもあるが、荒牧、宮坂、ノーマン、石飛はそれぞれに両偈でほぼ同様の訳を

施しているが、中村訳は「ひろがりの意識は」として916偈と全く異なっている（その理由については、註（p.394-5）に解説されている）。874偈 d 句の *saññānidānā hi papañcasamkhā* は、*papañca* をその原義（*pra√pañc*）に従って「～の拡大、発展」といった意味と解せば、「というのも、想いにもとづいて、〔想いの〕広がりが〔生じる〕からである」と訳せるであろうから、両偈でその語の意味が同じであれば、916偈 a 句の *mūlaṃ papañcasamkhāyā* も同様にして「〔想いが〕広がるといわれることの根本である……」と訳せるのではないかと考えられる。因みに、SnA（p.562）は、*papañca* を「その根本は無明などの煩惱（*avijjādayo kilesā*）」と註釈する。尚、原始仏教における *papañca* の意義については、櫻部建『増補版 佛教語の研究』文栄堂書店 1997.11 pp.110-118、中谷英明「潜在的自我意識（*papañca*）と認識（*saññā*）の転換— *Aṭṭhakavagga* の記述による—」『印度学仏教学研究』第59巻2号 pp.868-859を参照されたい。

さて、この1119偈や916偈は、恒常的に実在するアートマンという誤った見解を断つことや、また「私は存在する」という誤った分別の根本を捨て去ることが説かれていても、主旨はいずれもそうした捉え方を否定するための宗教的実践に置かれているのである。いずれ無我説として理論的に確立されることになる自己存在の真実の在り方も、最初は決してアートマンを否定して仏教独自の思想として提唱されたわけではなく、916偈の d 句や1119偈の b 句に説かれているように、あくまで内なる自己の在り方を「絶えず〔自己の存在を〕正しく自覚していて（*sadā sato*）」を始めとする宗教的実践を通して自己の真実の在り方を徹底的に問い続けることに留まっていたのである。そう考えると、ゴータマ・ブッダや次代の仏弟子たちの最古の仏教においては、アートマンという誤った見解を否定しても、「無我」が思想として説法されたとは考えにくい。

第一七経「若き学生ピンギヤの問い」

- (1121) *disvāna rūpesu vihaññamāne, Piṅgiyā ti bhagavā,*
ruppanti rūpesu janā pamattā, tasmā tuvaṃ Piṅgiya appamatto,

jahassu rūpaṃ apunabbhavāya.

「世尊は語った。ピンギヤよ、〔身体の〕さまざまな物質的要素が〔次第に〕害われていく人々を見て〔いながら〕⁽¹⁾、勝手気ままな〔生活を送ってれば、そうした〕人たちは〔身体の〕さまざまな物質的要素に悩まされる。それ故に、ピンギヤよ、勝手気ままな〔生活を送る〕ことなく〔身体の〕物質的要素〔へのとらわれ〕を捨てなさい。あなたは二度と生存することがないように」

- (1) a 句の rūpesu を中村訳は「物質的な形態があるが故に」と、宮坂訳は「もろもろの色かたちあるものに」とするのに対して、荒牧訳は「さまざまな身体的存在があるからこそ」と身体的存在と限定する。b 句から判断すると、さまざまな物質的要素を身体と理解するのが適切である。また、rūpa が複数形であるのも、単体としての身体ではなく部位などさまざまな要素を含み置くものと考えられているからであろう。したがって、「〔身体の〕さまざまな物質的要素」と訳す。a 句の vihaññamāne を宮坂訳は「とらわれている者たちを」とするが、ここは中村訳や荒牧訳のように「人々が害われるのを」や「衰えていくことを」と解釈すべきであろう。

(1123) taṇhāhipanne manuḥ pekkhamāno, Piṅgiyā ti bhagavā,
santāpajāte jarasā parete, tasmā tuvaṃ Piṅgiya appamatto,
jahassu taṇhaṃ apunabbhavāyā, ti.

「世尊は語った。ピンギヤよ、人々が渴愛に陥ってしまい、苦しみが生じ、老いにひしがれているのをよく観察しつつ、ピンギヤよ、そうであるから、あなたは勝手気ままな〔生活を送る〕ことなく渴愛を捨てなさい。二度と生存することがないように」

《略号》

〔パーリ語原典〕の略号は、前号と同じであるので、紙面の関係で省略する。

〔翻訳文献〕

荒牧訳：荒牧典俊・本庄良文・榎本文雄訳『スッタニパータ [釈尊のことば]』講談社学術文庫 2015.4（第一章・第四章・五章担当）

石飛訳：石飛道子訳『『スッタニパータ』と大乘への道 ブッダの教えはどのように大乘仏

『スッタニパータ』第五章「パーラーヤナ・ヴァッガ」の研究

- 教に引き継がれたのか？』株式会社サンガ 2016.5（第四章のみの翻訳）
- 榎本訳：荒牧典俊・本庄良文・榎本文雄訳『スッタニパータ [釈尊のことば]』講談社学術文庫 2015.4（第三章担当）
- 中村訳：中村元訳『ブッタのことば—スッタニパータ—』岩波文庫 1984.5
- ノーマン訳：K.R.Norman, *The Rhinoceros Horn and Other Early Buddhist Poems (Sutta Nipāta)*, PTS., London, 1985
- 早島訳：早島鏡正訳『仏弟子の詩』（原始仏典九）講談社 1985.9
- 村上訳3：村上真完・及川真介訳『仏のことば註（三）—パラマッタ・ジョーティカー—』春秋社 1988.1
- 村上訳4：村上真完・及川真介訳『仏のことば註（四）—パラマッタ・ジョーティカー—』春秋社 1989.10
- 宮坂訳：宮坂宥勝訳『ブッタの教え スッタニパータ』法蔵館 2002.10
- * 本論では取り上げなかったが、他にも翻訳や解説があるので、ここに挙げておく。
- 渡辺照宏訳『渡辺照宏著作集』第五卷（筑摩書房）1982 に所収
- 三枝充恵訳『初期仏教の思想（中）』第三文明社（レグルス文庫）1995.3 に所収
- 前谷彰訳・解説『ブッタのおしえ ～真訳・スッタニパータ～』講談社 2016.5
- アルボムッレ・スマナサーラ『パーリ経典解説 スッタニパータ 第五章「彼岸道品」』（第一巻）株式会社サンガ 2018.6（第五章：1032－1055偈の解説）